

戦死した父への思い

水野和子さん

私が6歳のとき、父は戦地に出征しました。昭和20年の寒い日でした。長湫景行天皇社の前で送別のあいさつがあり、父は村の人々に日の丸の旗で見送られ、オート三輪車に乗って名古屋の方へ行ってしまいました。

召集令状の赤紙が自宅にきてから出征の前日まで、父は、家の周りや離れ、米蔵を一生懸命に掃除していました。これが父との最期の別れと感じたのか、私は父のそばを離れることができませんでした。父は、近所の人に「留守にしますので、家のことを頼むぞな、頼みますぞな」と頼んでいました。

父が出征してしばらくすると、アメリカ軍の大型爆撃機B29の空襲が激しくなってきました。ある夜、防空壕から出て、名古屋の西方を見ると焼夷弾爆撃による火災で、空一面が真っ赤になっていました。

当時、私たちは国民学校（現在の長久手小学校）に入学し、1、2年生は、近くの分教場で学びました。空襲警報が鳴ると、必死で下校することが度々ありました。また、自宅の近くの県道を日本軍の戦車が轟音を立てて走ることもあり、怖くて近所の麦畑の中に身を隠し、やり過ごした記憶があります。

ある時、現在の名古屋市名東区藤が丘付近にB29が墜落し、現場に見に行きました。そこでは、機体が散乱し、我慢できないくらいの悪臭が鼻を襲いました。また、アメリカ軍の兵士の遺体もあったようです。

夏になった昭和20年7月中旬、父の戦死の公報が自宅に届きました。亡くなったのは、7月2日と記録されていました。父は、母と私たち兄妹3人、それに祖母を残して36歳の若さで亡くなったのです。母は、広報を見て縁側で泣き崩れました。後日、父の戦友の話によると、九州の筆立山の弾薬庫入り口で、艦載機の機銃掃射で撃たれたそうです。父は、弾薬が大量に保管してある弾薬庫の中に入ると危険と感じ、弾薬庫の入り口にいたと聞いております。

父の戦死で、母子家庭となってしまった私たちの生活は大変なものでした。祖母は、非常に落胆し、病に伏してしまっただけです。母は、生計を立てるため、リヤカーに野菜を積み、長久手から名古屋の大曾根まで、早朝から行商に出かけなければなりませんでした。当時は道路が整備されていなかったため、本当に1日仕事でした。私たち兄妹も学校が休みの日には、母の手伝いで名古屋まで行商に行きました。

苦しい時、もし父が生きていたらどんなに幸福だろうかと何度も思いました。天国の父が助けてくれたのでしょうか、おかげさまで今日まで、生きることができました。

これからは、戦争によって、私たちのような母子家庭の悲しい思いを誰にもさせたくありません。子供や孫が、戦争に行かなくてもよい平和な世の中になってほしいと切に願っています。